

Whoops!

2018 Autumn Vol.20

多摩美術大学芸術学科フィールドワーク設計ゼミ発行



特集 「着る・織る・染める」

川住研二、齋藤知華、小千谷縮



「Whoops! 20号の軌跡」



ロックの歌詞が道後温泉に～尾崎世界観

言語と美術の展覧会とは?～平出隆

佐々木敦

吉増剛造



3 Tamabi Report

「ジャンルを貫通する」批評とは？

～佐々木敦（批評家）

世界に穴を開ける

～吉増剛造（詩人）

6 特集 着る・織る・染める

気鋭のデザイナーに聞くロンドンと日本の芸術教育の違い

～川住研二（ファッションデザイナー）

廃棄物を資源にした染め物づくり

～齋藤知華（テキスタイルデザイナー）

小千谷縮 経糸×緯糸×作り手 = 伝統工芸

14 特集 編集長が語る Whooops! 20 号の軌跡

16 Interview

言語と美術の展覧会とは？

～平出隆教授に聞く

18 Whooops! 見聞記

ロックの歌詞が道後温泉の街なかに出現

～尾崎世界観（ミュージシャン）



(上) 吉増剛造さん（詩人）の特別講義の一コマ→P.4

(下左)「道後オンセナート 2018」で展示された尾崎世界観さんのプロジェクトの一部→P.18

(下右) 小千谷紬と小千谷縮→P.12

Whooops! Vol.20/2018 AUTUMN

発行日= 2018年 10月 25日

編集長・デザイン監修=小川敦生（多摩美術大学芸術学科教授）

編集・誌面デザイン=板垣万由子、青木真梨恵、佐藤仁奈、豊島瑠南、
奈良島隆人

表紙レイアウト=佐藤仁奈

表紙写真=川住研二さんの作品（→P. 6）

発行=多摩美術大学芸術学科フィールドワーク設計ゼミ

〒192-0394 東京都八王子市鎌水 2-1723

印刷=株式会社 マルニ 印刷自販機 .com

問い合わせ先= aogawageige77@yahoo.co.jp

Twitter @aogawageige77 Webmagazine「タマガ」= QRコード

●掲載記事、写真の無断転載を禁じます。



Whooops![ウーブス!]について

本誌を手にとっていただき、ありがとうございます。

誌名「Whooops!」は、「あっ！」という驚きを表しています。

あなたの中で何かが弾けてほしい、刺激的な日々を送ってほしい。

そんな思いを込めて制作しました。

お読みいただくうちに小さな「あっ！」が生まれてくれますように！

「ジャンルを貫通する」批評とは？

佐々木敦（批評家）

7月14日、本学のオープンキャンパスに合わせて開講された「21世紀文化論」授業で、批評家の佐々木敦さんが特別講義を行った。批評の他に音楽レーベル「HEADZ」を主宰するなど、多くのジャンルで活動している佐々木さんが、今日の表現活動と批評について学生たちに語った。タイトルは『音響・映像・身体—来たるべき批評を求めて』。ところが、テーマを発表した後にこの三つのキーワードについて考え直すことになったそうだ。



講義で紹介された映画『わたしたちの家』の本編の映像の一部

批評家として活動する佐々木敦さんは、文学、音楽、演劇、映像と対象ジャンルが実に多岐に渡る。この日の講義のテーマについては、「本来は『言語・身体・オーディオビジュアル』である」と説明する。

「僕には自分の活動するジャンルを次へ次へと広げているという意識は実はあまりない。いくつものジャンルをまたがって活動しているが、それぞれのジャンルの限定された部分しか相手にしてこなかった」

どうも、何か一つのジャンルで活動をするという普通の批評とは根本が違うようだ。自分の興味のあるものが多くのジャンルをまたぐ。佐々木さんはそれを「ジャンルを貫通する」という言い方をする。佐々木さんは、今まで手がけた仕事や武蔵野美術大学で「サウンドイメージ」という講義をしていた頃の教え子たちの活動の中にその例を見出していた。この日は三つを紹介した。

一つ目は、映画監督、清原惟の『私たちの家』。ある古民家で二つの時間が並行して流れる作品だ。二つ目は学生

時代から活動を支援してきた3人組のロックバンド『空間現代』。複数の曲を分解して再編成し、断片的な音とリズムを繰り返す「マスマティクス・ロック」という演奏スタイルが、一部でカルト的な人気を得ているという。三つ目は、小説家の滝口悠生の連作短編集『茄子の輝き』。東日本大震災をきっかけにある男が別れた妻の生家へ電話するという共通した筋書きの中で、それぞれの物語の中に生まれる微妙な「ずれ」が奇妙な余韻を残す。

「ズレと反復」で共通

紹介された三つは映画、音楽、文学とジャンルこそ違いますが、「ズレと反復」という点で共通している。何かを繰り返すたびに生じる違和感—そこに佐々木さんは惹かれるようだ。

講義のテーマの中にある「身体」の視点でも、精神的に多分野に興味の幅を広げている。例えば、吃音に言語と身体の行為が合わさっていることを体験者のインタビューから解析した伊藤亜紗の著書『どもる体』、役者がただ

淡々とテキストを発話することで知られる演劇カンパニー「新聞家」、壊れたテープレコーダーのように二人が同時にしゃべり続ける演技で注目を浴びる演劇ユニット「スペースノットブランク」などに注目しているという。言語と身体の境界が曖昧になるような表現を求めて、佐々木さんは批評活動を続けている。

「批評は「上から目線、とよく言われますが、僕の場合は「外から目線、だと思っています。本人がやったつもりじゃないことを指摘して新しい可能性や価値を引き出し、肯定するのが批評だと思う」

批評には、クリエイターたちが意識していない様々なものをつなぎ合わせる力がある。ニュートラルな視点を持ってジャンルをまたいで活動すれば、クリエイターたちにもフィードバックされるはずだ。

取材・文・撮影（*）・レイアウト
＝豊島留南

この特別講義を担当した本学科の安藤礼二教授（左）と佐々木敦さん



佐々木敦（ささき・あつし）

1964年生まれ。批評家。慶應義塾大学、東京芸術大学等の非常勤講師、早稲田大学客員教授等を歴任。現在は早稲田大学非常勤講師及び立教大学兼任講師。音楽レーベル『HEADZ』主宰。著書に『ニッポンの思想』『未知との遭遇』『新しい小説のために』『ゴダール原論 映画・世界・ソニーマーキュ』など。

Tamabi Report 世界に穴を開ける 吉増剛造（詩人）



目を閉じて朱墨でドリッピングをする吉増さん

9月14日、本学絵画学科油画研究室主催の特別講義に、日本を代表する詩人の吉増剛造さんが特別講師として招かれた。映像作品の上映や吉増さん自身の言葉を聞き、詩人の世界へと誘われる。

本学八王子キャンパスレクチャーAホールの上壇に、吉増剛造さんの著書や関連書籍がずらりと並び、その横に大きな黒いシートが敷かれていた。シートの上には、色あざやかに"ドリッピング"（絵の具を垂らす行為）された長い銅板の巻物や、吉増さんの原稿が数点。作品と作品の間には墨汁などが入ったボトル、かなづち、ペンライトなど、様々な小物が数個置かれている。壇上全体が一つの芸術作品のような空間になっていた。

学生との交流が刺激に

講義は二つの映像作品を見ることから始まった。一つ目は吉増さんが自ら撮影したロードムービーであり、『gozo Ciné』と呼ばれる作品。残像が揺らめ

く不思議な映像と、ゆったりとした吉増さんの声を聞きながら、東京都羽村市にある「まいまいず井戸」を巡る。二つ目は今年NHKで放送されたドキュメンタリー作品。東京、福島、沖縄など各地を歩きながら、それぞれに関連する吉増さんの詩のルーツを探る。どちらの作品も、見ているうちに自然と詩人の世界へと引き込まれていく。

上映が終わると、絵画学科の石田尚志准教授に招かれて吉増さんは壇上へと姿を現した。つい数分前まで映像の中にいた人物が目の前に立っているというのは、映像と現実が混ざり合うようで少し奇妙な感覚である。映像を振り返りながら吉増さんと石田准教授の対話が続く。その中で、吉増さんが本学科で教鞭をとっていた当時の話が挙がった。

「芸術学科はもちろんのこと、彫刻学科や建築（環境デザイン学科）の学生とも交流があった。それが私の作品制作の大きな刺激となったのは間違いありません」

吉増さんと多くの作品を共同制作した美術家の若林奮さん（故人）との交流についても語った。同じ高校の先輩後輩の間柄であり、また、多摩美術大学で教員をするなど、共通点の多い二人は、一緒に映画『2001年宇宙の旅』を3回も鑑賞するなど、プライベートでも仲のいい間柄だったようだ。

「穴」を開ける

「文字を書く、ということを一生涯大事にしていきたいと思っています」と吉増さんは語った。壇上には、吉本隆

明の詩篇『日時計篇』の写本が展示されている。吉増さんが自ら引いた罫線の上に細かな文字が綴られている。一目で文字に対する愛情が感じられる。

「細く文字を書くというより、文字で穴を開ける感覚です」と吉増さんは言う。一つ一つの文字を大事に大事に書いているのだ。詩に読点が多用される理由もまた、詩に穴を開けるため。「ひょっとすると、私は世界に穴を開けたいのかもしれない」と吉増さんは真顔で語った。

吉増さんの芸術活動は詩に留まらず、『gozo Ciné』のような映像作品や、写真、パフォーマンスなど実に多岐にわたっている。石田准教授と多様な作品制作について話す中で、吉増さんはおもむろに朱墨が入ったボトルを手に取った。そして、目を閉じて壇上に広げられた巻物の上に朱墨を垂らし始めた。自分の靴がオレンジ色に染まることも気にせずに、吉増さんは"ドリッピング"を続ける。突然始まったパフォーマンスに会場にいる学生たちは息を飲み、静まり返る。その中で絵の具が落ちる音だけが響き渡った。

「生きた時間」が 表現に変わる

講義の終盤に、学生から「自分の考えを作品に表現する」ことについて質



壇上に展示された銅版の作品

問が挙がった。

「無理に何かを表現しようとするのではなく、少し後ずさりしておくくらいでいい。とにかく作り続けて、表現が生まれるまで待つことが大事です」

吉本隆明の『日時計篇』を書き写す作業を、吉増さんは実に7年間も続けているという。最初は苦痛だったが、いつしか喜びへと変化したそうだ。

映像の中で「詩を書くときに、頭の中が真っ白になる」と語っていた。そ

れは、半世紀以上もの間、第一線で詩を書き続け、「生きた時間」を積み重ねた吉増さんゆえの境地なのだろう。

取材・文・撮影・レイアウト
＝奈良島隆人

特別講義を担当した本学絵画学科の石田尚志准教授（左）と吉増剛造さん



吉増剛造（よします・ごうぞう）

詩人。1939年生まれ。64年、詩集『出発』でデビュー。以降、現代詩人として多領域、多媒体で活動。美術館での発表も多く、渋谷区立松濤美術館（東京）では「涯テノ詩聲（はてのうたごえ）詩人 吉増剛造展」が8月11日～9月24日まで開催された。



吉増さんが書き写した吉本隆明『日時計篇』。幾重にも紙が貼られている



特集

「着る・織る・染める」



Kenji Kawasumi

気鋭のデザイナーに聞くロンドンと日本の芸術教育の違い

ロンドンの芸術大学 Central Saint Martins を卒業し、素材にこだわったデザインの作品を制作するファッションデザイナーであり、講師としても活躍する川住研二さんに、ファッションを通して「つくる」とはどういうことか、さらには日本とロンドンの芸術教育の違いについて聞いた。



制作時の様子。ウレタンにペイントを施している

◎素材を楽しむ

Central Saint Martins(CSM)のファッションショーでランウェイをさっそうと歩くモデルたち。一見すると彼らが着る服の生地は分厚く、でこぼこしている。しかし、無骨で無機質な印象はまるでなく、むしろ優しい柔らかさを感じる。理由は、生地に使われている素材にある。ホームセンターやスーパーマーケットでよく目にするウレタン(スポンジ)が使われているのだ。川住研二さんは、この作品をはじめとして、服の素材に布だけではなくスポンジやプラスチック、アクリルなど、いわゆる生地としてはあまり使われない「異素材」を組み合わせた服を多く制作するデザイナーだ。

「誰もが知っている素材だけど、誰もその使い方を思いつかない。そんな意外性のある服をつくりたい」と語る。

川住さんがものづくりを始めたのは高校生の時。地元、山梨県甲府市で見つけた4万円のカバンと似たものを400円で自作しようと思ったのがきっかけだったという。その後ロンドンに渡り、CSMで学んでいく過程で、服をデザインするだけではなく素材そのものに着目するようになり、異素材を使ったデザインにつながった。

◎日本ではクリエイティビティを発揮しづらい

現在、川住さんは自身が卒業した日本外国語専門学校の芸術留学科でファッションデザインを教えている。しかし、日本のファッション教育と川住さんが学んできたロンドンのCSMでは様相が大きく異なるようだ。「日本の教育は職人を育成することには長けているが、クリエイティビティを



ウレタンを使用したCSM卒業制作。木彫刻に着想を得ている

発揮しづらい環境だと思う」と川住さんは話す。事実、今のファッション業界では、デザイナーが制作したデザインの型や基盤を作るパタンナーとして活躍する日本人が多いが、その反面、自らデザイナーとして活躍する人が生まれにくいという。

CSMではロンドンという環境もあり、国籍や文化、セクシュアリティも異なっていて、様々なインスパイアを受けることができたという。しかし、講師としてファッションを教えていると、周りと違うことをする、共感されないものを作る、ということに不安を感じたり、個性的であるがゆえに異端視されたりしてしまう学生が多いことを実感。「自分が好きなものを肯定的に受け入れて、恥ずかしがらずに表現することが、今の日本の環境では難しいのかもしれない」と川住さんは懸念している。

◎ 自分のルーツへ

川住さんは最近、アシスタント講師をしている『こののがっこう』で自分にとっての人間像とは何かを問い、自分のルーツを掘り下げる、ということをしているそうだ。

「ファッションにおいて、理想的なものを作ろうとすることは大事だが、それが本当にその人自身を表象しているとは限らない」

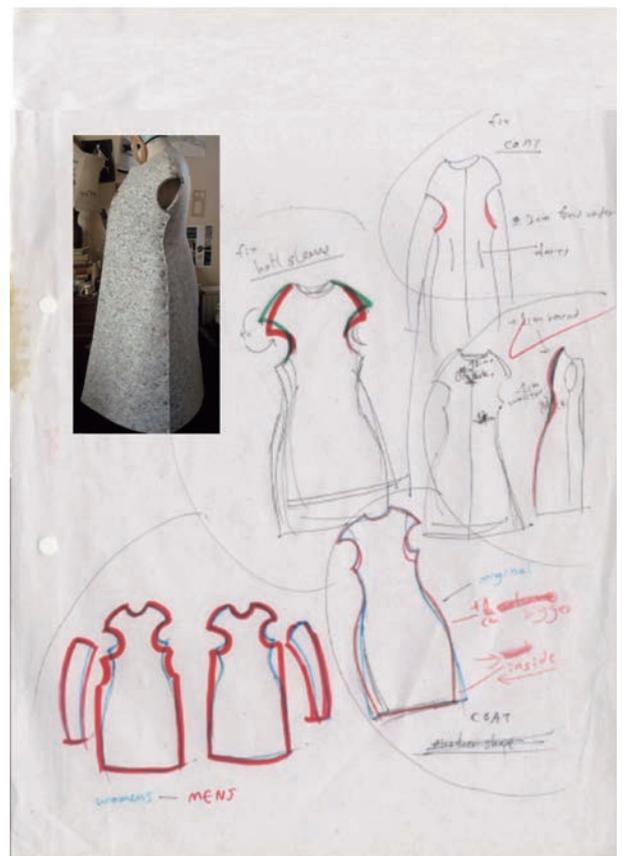
自分というものを再確認するために、一度自分の過去をさかのぼって、どのような生活をしてきたのか、自分

にとって当たり前の日常とは何かを改めて考える。その上で、本当に自分が表現したいもの、いわばアイデンティティを探り、自分の人間像について考えてほしいそうだ。これはファッションに限らず、すべての芸術活動において重要なことではないだろうか。自分の原点に立ち戻り、もう一度自分を再確認することによって、「つくる」ということの本質が見えてくるのかもしれない。

取材・文・撮影・レイアウト
=奈良島隆人



デザイン画。試行錯誤の痕跡がうかがえる



川住研二 (かわすみ・けんじ)

1985年生まれ。株式会社リトゥンアフターワーズ所属、「こののがっこう」アシスタント講師。日本外国語専門学校ファッションデザイン / 芸術留学科講師。Central Saint Martins College, Fashion design with Knitwear BA2010年に卒業、同校MAを2012年修了。London Fashion Week AW12, MoMA 2013, などに参加。TOKYO DESIGN WEEK アジアアワード in ファッション 2015年 グランプリ受賞。

【広告】

多摩美術大学芸術学科

つくる

考える

伝える

多摩美術大学美術学部芸術学科研究室

〒192-0394 東京都八王子市鍵水 2-1723

tel:042-679-5627



廃棄物という資源を 利用したものづくり

広島県尾道市の瀬戸内海に浮かぶ向島に設立された立花テキスタイル研究所では、できる限り地域の「生産物」と「廃棄物」だけを利用して織り、染めた布を生産しているという。同研究所のテキスタイルデザイナーで本学出身の齋藤知華さんが7月12日、本学八王子キャンパスで講師を務めた特別講義でまず話してくれたのは、「綿畑を耕す」ことだった。



立花テキスタイル研究所のオリジナル商品「ボートバッグ」。綿花の茎、柿渋、柿渋の鉄媒染によって染められている

日本の綿の自給率は現在ほぼ0%だという。江戸時代にはもちろん100%が国内で生産されていた。しかし日本の綿は毛足が短く機械で紡ぎにくいなどの短所があり、明治以降輸入されてきた安い海外産の綿に取って代わられた。齋藤さんがデザイナーとして働いている広島県尾道市の立花テキスタイル研究所は、その現状を寂しく思い、なんとか国内産の綿で布を生産できないかと模索してきた。

まず始めたのは自分たちで綿畑を耕すことだった。研究所がある尾道の向島には休眠した畑がたくさんあり、それらを何とか活用できないかと思っていたという。

自分たちによる綿作りに取り組んでしばらく経ったある日、「種まき会」を始めた。毎年4月のみどりの日、地域の人たちを呼び畑と一緒に綿の種をまくのだ。秋にはやはり地

域の人たちと収穫祭をする。研究所のメンバーは皆、島の外から移住した人たちだったが、こうした行事によってだんだん島民と打ち解けることができるようになっていった。

布作りそのものにも大きな成果があった。実際に収穫した綿で作った布の手触りがとてもよかったのである。調べてみると、輸入綿は、収穫をしやすくしたり、綿か

すの混入を防いだりするために枯葉剤を多用しており、それが手触りに影響していた。齋藤さんたちが丹精を込めて育てた綿のおかげで、触るとふわっと温かみのあるテクスチャーに仕上がっていたようだ。

齋藤さんは、「地域との結びつき」という点でもう一つの事例を挙げた。瀬戸内海に浮かぶ向島は昔から物流の要地で、江戸時代に



立花テキスタイル研究所で耕されている綿畑。海外で生産されている綿花は通常上向きに生るが、雨の多い日本やアジアで作られる綿花は水で腐らないよう下向きにその実綿をつける



向東地域に構える工場のようなす

は日本海の港を行き来する北前船が物資を運んでいた。西回り航路の起点となっていた尾道ではそれらの船に張られる帆布の生産が盛んだった。現代でもバッグや跳び箱に張る布から相撲の廻しまで、厚手で丈夫な帆布はたくさんものに使われているが、近年は後継者不足などから生産地が減っており、尾道では工場が1軒しか残っていないそうだ。同研究所はその工場とも密接に関わり、帆布製品の製造を主な事業として行っている。

同研究所では地域で「生産すること」に取り組む一方で、「捨てられるもの」にも目を向けている。綿は1年草なので、普通は実を取ると枝は捨てられてしまう。その枝を粉碎、乾燥して染料として使う方法を見つけたのだ。きれいなピンクベージュの植物染めが実現したという。尾道の鉄鋼所で毎月2トン廃棄される鉄粉を再利用する術も開発した。布の表面に固着させる「鉄粉プリント」はシックな黒色で、「人気のカラーになった」という。

国内6割のシェアを広島が持つ養殖牡蠣でも、可食部に対する廃棄率が90%に及ぶ殻が藍染めの管理に使えることを発見した。殻を高温で焼いてできた粉を藍染めに足すことでよりよい効果が生まれるという。向島内にあるカレー屋で廃棄される玉ねぎの皮からはアルミ媒染で鮮やかな黄色に、尾道市内の家具屋さんから出るクルミの木の木っ端からは鉄で媒染すると灰色に染まるそうだ。

齋藤さんがなるべく化学染料を使わず、天然の染料にこだわるようになったきっかけは、初めて尾道を訪れることとなった大

学2年生の頃までさかのぼる。立花テキスタイル研究所の開設者で代表を務める新里カオリさんは、齋藤さんが高校の時に通っていた予備校の先生で、美術大学に進学してテキスタイルデザインを学ぶ影響を与えた。武蔵野美術大学を卒業した彼女は、尾道のシャッター街や廃校を会場にして学生を誘致し、植物染料と帆布の魅力を伝える「尾道帆布展」の活動に携わっていた。東京ではお店で購入していたような天然染料の植物が自生するほどの自然に恵まれていた尾道の魅力と、その時新里さんが言っていた「化学染料は使わない」という言葉は当時大学2年生だった齋藤さんに強い印象を残す。

立花テキスタイル研究所で働き、尾道に移り住んできてからさらにこの言葉の意味を意識することとなった。島では下水道が整備されていることの方が珍しく、排水が直接周りの海に影響を与える。最初は化学染料の鮮やかな色彩を思い出すこともあったが、研究所の前を流れる川で気持ちよさそうに泳ぐ魚に気づき、植物染料を使うことの意義をより身近な問題としてとらえたという。

「大量生産」の現場では、しばしば同時に「廃棄物」が生み出される。その廃棄物を新たな「資源」にすることの意義は大きい。特に日本は「資源」に恵まれておらず、余計な労力や大きなコストを使って調達する必要があったからだ。ひょっとすると、日本のあるいは世界のあらゆる土地で「廃棄物」を「資源」化していけば、各地の生産力はじわじわと着実に上がり、自給自足、地産地消が当たり前の

世の中に近づくのではないかと。齋藤さんたちの試みは、そんな地球の未来をも思わせる。

一般に生物界は哺乳類を頂点、バクテリアを底辺としたヒエラルキーの下に存在していると考えられるが、「私たちはバクテリアのように分解者のようなものづくりをしたい」と齋藤さんは言う。動物たちが捨てたものを分解して地球に還元していく。そんな発想から生まれた「廃棄物」の「資源」化は、尾道の近くに浮かぶ小さな島から始まっているのである。

取材・撮影(*)・文・レイアウト=青木真梨恵
写真提供=立花テキスタイル研究所



本学生産デザイン学科テキスタイルデザイン専攻の特別講義(2018年7月12日)より(*)

齋藤知華(さいとう・ともか)

(株)立花テキスタイル研究所 テキスタイルデザイナー。1983年神奈川県生まれ。2008年多摩美術大学大学院テキスタイル領域修了。



小千谷縮 経糸×緯糸×作り手 = 伝統工芸

日本には機織りという伝統文化が存在する。今回訪ねたのは、新潟県小千谷市で織られている「小千谷織物」の工房。職人に話を聞きながら、1階「織之座」の体験工房での機織り体験を交えて「作り手」の視点からその魅力と実態を探った。



2階にあるショップ匠之座。小千谷の織物を使った商品を販売。反物だけでなく、洋服やバッグなどの様々な形の織物製品が揃っている

新潟県小千谷市では、小千谷縮(ちぢみ)をはじめ、小千谷紬(つむぎ)や片貝木綿など、様々な織物が織られている。小千谷縮は苧麻(ちよま)が原料の麻織物だ。強い撚りをかけた緯糸を用いて、縞・格子・緋(かすり)などを織っていく。織り上がった布は、シボという皺のような独特の質感を出すため、木舟の中で湯もみをする。そうして完成した小千谷縮が、着物をはじめとする様々なものに加工されていく。

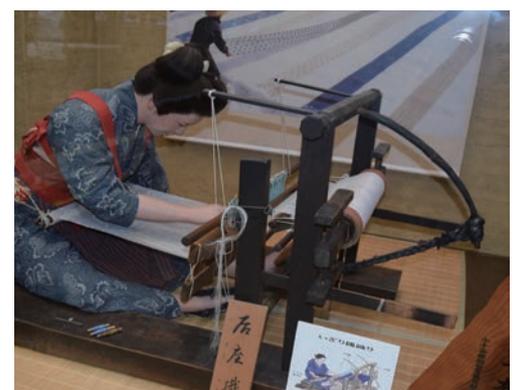
JR上越線小千谷駅を出て信濃川を越え、アーケード街から外れてしばらく歩くと、小千谷市総合産業会館サンプラザの建物が見えてくる。そこには織物工房織之座があり、小千谷縮ができるまでの工程と歴史の展示とともに

に体験工房がある。そこで、緋織り体験をさせてもらった。織れる柄にはいくつか種類があり、柄によって難易度が変わるという。サンプルを見せてもらい、縁起のよさそうな招き猫の柄の緋コースターを織ることにした。

体験用の糸は初心者でも織れるように製品に使うものよりずっと太く、機(はた)も小型だが小千谷ならではの緋織りができる。まず端の踏木を踏んで開いた経糸に緋染めの緯糸を通す。緋糸には布の左右の目安となる色が付けられているので、これが経糸の両端に来るように合わせる。次に箎(おさ)という櫛状の器具を使い緋糸を手前に寄せてもう片方の踏木に踏み変え、今度は力強く数回箎を引き、経糸の間に緋

糸を打ち込む。この緋糸通し～位置調整～箎を使っての打ち込みを繰り返す。経糸と緯糸がどンドン布になっていくのを見て、中島みゆきの『糸』がどこから流れてくるような気分になった。

緋糸に染めてある色がどの位置に来るのかを確認し、微調整しないと柄に





拵織り体験の様子(左)と、糸に図案通りの染色をするための木羽(こぼ)定規(右)

狂いが生じる。最も神経を使った作業だった。縫製も接着もしないので、体験では編み物のようにほどいてやり直しができるのが救いだ。織っていて柄が狂うたびにほどいては微調整し、何度もやり直す。しかし、細い糸を用いる実際の製品づくりではそうはいかないというので、さらに神経を使いそうだ。しばらく悪戦苦闘を続け、ようやく拵織りの招き猫が完成した。見本と比べると少々歪んでいるが、大きな達成感があった。実際に売られている織物は大きく、柄も複雑なのに正確に織られ美しく仕上がっている。まさしく職人のなせる業なのだ改めて実感した。

同じく小千谷市にある高政織物では、伝統工芸士の高橋直久さんが小千谷縮と小千谷縮を織っている。高橋さんは、伝統的工芸品にあたる柄のついた縮をわくわくしながら織っているという。「お客様にお求めいただいて、次に会った時によかったと言ってもらえるのがうれしいです」と、やり甲斐を語った。しかし、苦勞も多く、「一つ一つの工程の外注のできる職人が減っていて、自分でやらなくてはならないこ



高政織物の工房で機械織りをする伝統工芸士、高橋直久さん。機械は40～50年ほど使われ続けている

とが増えている。たくさん作りたくても作ることができずつらい。このままでは仕事が成り立たなくなり、織物ができなくなっていくのではないかと思います。なんとか続けなければなりません」と、作り手不足に悩む様子を見せた。

織之座での取材と体験の後、高橋さんは高政織物の工房へと招いてくれた。そこには、機織りの機械が数台と織り中のヒョウ柄の織物があった。機械であっても体験した織り方と理屈は変わらない。しかし、二つの踏木は一つのペダルになり、それを踏むだけで緯糸が経糸の間を高速でくぐり抜けるという具合に効率化されているところが機械らしい。機械の動きに合わせて高橋さんは素早く正確に柄を作っていく。機械の使い方にも、職人の業が表れている。

小千谷縮の美しさは、作り手の苦勞があってこそのものであったのだ。作り手の輝く姿は、小千谷縮のように美しかった。

取材・文・撮影・レイアウト
= 板垣万由子



インタビューに応じる高橋さん

小千谷織物工房
(小千谷織物同業協同組合)

〒947-0028

新潟県小千谷市城内 1-8-25

小千谷市総合産業会館サンブラザ

1階(織之座/体験工房)、

2階(匠之座/ショップ)

特集 編集長が語るWhooops! 20号の軌跡



「Whooops!」誌の主役はゼミ生たち。過去の号を見ながら企画の打ち合わせをする様子（写真提供＝「R」誌編集部）

本学科のフィールドワーク設計ゼミで2012年7月に創刊した本誌「Whooops!」が、この秋、20号を迎えた。編集長・小川敦生が創刊からの7年間を振り返り、歴史と思い出を語った。

2012年、本学科の教授に就任した時に、雑誌の制作をゼミの根幹に据えた。当初は、1年で編集や制作のシステムが安定し、その後の作業が楽になるのではないかと楽観的な予想をしていた。だが、実際は違った。いつまで経っても楽にならないのだ。ゼミ生は仕事ができるようになったと思ったら卒業し、毎年「新入部員」が入ってくる。

一方、その状況は悪いことばかりでもないと感じている。いつも新鮮な感覚で企画や編集のシステムに関するアイデアを出してもらえるからだ。最初の年に雑誌のロゴをきちんと作ろうと提案したのも、今年度になってからネット上のシステムを上手に使うことで効率的な制作をすることを推進したのもゼミ生だった。いつも異なる個性と向き合うのは大変だが、だからこそおもしろいと、はにかみながら語った。

個性豊かなゼミ生たち

本当に個性的な、また有能なゼミ生に恵まれてきたとの思いを強くしている中で、何人かのゼミ生について、振り返ってみた。

荻原楽太郎君は、写真の撮影に非凡な才能を発揮していた。本学科内だけではなく多摩美の学内全体でも知る者の多かった彼は、ゼミ生になる以前から本誌で多くの写真を掲載していた。たとえば学内の実技を学んでいる学科に、ゼミ生が記事にしたい美術家の卵がいたときに、取材に同行してポー

トレート写真などを撮影してもらった。創刊号表紙のしりあがり寿さんや2号表紙の竹中直人さんを撮影したのも楽太郎君だった。3年生になり、ゼミ生となるのは自然な展開だった。

経済的に苦しいときでも、取材があれば地方にも出かけていた。ゼミで瀬戸内国際芸術祭の取材に行ったときも、もれなく現れた。常にカメラを自分の子供のように大切に扱っていたのが、印象的だった。本当に写真を愛していたのだと思う。

結局彼は卒業はしなかったが、十分なキャリアを重ね、今は職業写真家として活動している。うれしいかぎりだ。



ゼミ生記者による取材風景（写真提供＝「R」誌編集部）



納本された「Whooops!」を確認している小川敦生編集長



「Whoops!」1～19号の表紙と姉妹媒体であるウェブマガジン「タマガ」のシンボル「タマガネコ」

菅原海人君は、ゼミに来る前に1年間の休学をしてきたという少々変わった経歴の持ち主だ。初めは、どんなにか厄介な学生が来るのだろうかかと心配したが、杞憂だった。よくよく聞いてみると休学は地方で民芸関係について調査をするためだったというのだ。実際、菅原君は「Whoops!」で民芸関係の充実した記事をたくさん執筆した。さらには、卒業論文でも民芸の一分野である『大津絵』をテーマに素晴らしい内容に仕上げ、教員たちをうならせた。

「Whoops!」は自分が調査をしたものを発表できる媒体だ。また、彼の休学で休学も捨てたものじゃないと感じた。

すさまじい働きぶり

韓松林さんは、1年生のときから活発だったが、3年生のときにフィールドワーク設計ゼミのゼミ生となって、さらにその本領を発揮した。印象的なのは、本学にいる環境を最大限に生かした記事を執筆したことだ。例えば本学の図書館についての特集記事を企画し、世界的な建築家である伊東豊雄さんなどを取材、極めて充実した記事を執筆した。実は、その記事を毎年本学科の新入生たちに配布し、素晴らしい図書館を理解・活用してもらおうための一助にしている。かけがえのない資料となっているわけだ。彼女は卒業後、北京清華大学という中国随一の大学の大学院に進学した。今後はどんな活躍をするのか、今から楽しみにしている。

最後に紹介する安部未来（あんべ・み

らい）さんは、彼女なくしては「Whoops!」はなかったのではないかとと思われるくらい存在だ。彼女は、フィールドワーク設計ゼミの1期生。

そもそも、自分の本学への着任が正式に決まったのは2012年3月だったので、翌月から始まる初年度はゼミ生はいないのではないかと考えていた。ところがふたを開けてみると、なぜか4人のゼミ生が履修登録をしていた。安部さんもその一人だったのだ。聞いてみると、彼女はマスコミ志望ということであり、ゼミを希望したことにも合点がいった。

そこからの安部さんの働きぶりはすさまじかった。彼女が持てる学内ネットワークを駆使してグラフィックデザイン学科などから学生デザイナーを連れてくる。そして雑誌のレイアウトや「Whoops!」のロゴなどの制作を、すごい勢いで進めた。もちろん企画もたくさん出した。「こんなアーティストを取材したい」「今度学校にこんな人が来るから記事にしたい」「ページが空いたからおもしろい企画で埋めようよ！みんな！多摩美生のファッションなんかどう？」…雑誌の内容がどんどん充実したものになっていったのである。

マスコミへの就職はかなわなかったものの、卒業後彼女が身を投じることになったのは、なんと木下大サーカスだった。しかも最初は広告・営業部に入ったのに、ほんの2ヶ月後、「パフォーマンス部に異動しました」という報せをもらい、心底驚いた。彼女はベリーダンスのサークルに入っており、確かにパフォーマンスの素養はあったが、何せサーカス

のパフォーマンスである。半端なことではできないはずだ。持ち前のパワーで涙ぐましいほどの努力をした成果だったに違いないのである。

唯一無二の「雑誌社」が誕生

出版人としては初心者の学生たちが雑誌を作るのは本当に大変だ。一方で、スキルとエネルギーが最初から高い学生もいる。さすが美術大学だなと感心する。思うに、大学生という存在はエネルギーにあふれている。大学という場所はそれを有意義に爆発させることができる場所だ。新聞社から転職したときには、ある程度はしめ切りなどから解放されるのではないかと期待したが、そんなことはまったくなかった。しかし、学生の好奇心とエネルギーに触れ、一緒に作業をすることで、ほかのどんな場所でも展開できない唯一無二の「雑誌社」がここに存在していることを、日々実感している。

取材・文・撮影・レイアウト＝佐藤仁奈



小川敦生（おがわ・あつお）

「Whoops!」誌編集長。1959年北九州市生まれ。美術ジャーナリスト。東京大学文学部美術史学科卒。日経BP社、日本経済新聞社記者を経て、2012年から多摩美術大学芸術学科教授。現在も美術ジャーナリストとして日本経済新聞「美の粋」欄や日経ビジネスオンライン「小川敦生のあーとカフェ」、ONTOMO（音楽之友社のウェブマガジン）等に多くの記事を寄稿している。

Interview

「言語と美術」の展覧会とは？～平出隆教授に聞く



平出隆《private print postcard 011-z》(2016年 個人蔵 ©Takashi Hiraide Photo: Kenji Takahashi)

千葉県佐倉市の DIC 川村記念美術館で、詩人の仕事を核にした展覧会が開かれている。タイトルは「言語と美術—平出隆と美術家たち」。多くの美術家や美術作品とかかわってきた詩人、平出隆本学科教授の長年の探究の集大成だという。準備が佳境を迎えつつあった平出教授の研究室を訪ね、話を聞いた。

「私はこれまで、詩を書く者として美術を眺めてきました」

平出隆教授はこれまで、詩人として取り組んだ仕事の中で、たくさんの美術家や美術作品と向き合う機会を得てきた。実際に会って一緒に仕事をした美術家もいれば、残された作品を通じて「見えない対話」を重ねた例もある。それぞれの美術家や作品とじっくり向き合う中で、次第に人間の存在の本質にかかわる2つの要素の関係について考えるようになったという。「言語」と「形象」である。詩と美術の成立要件であるそれらは、いわば音と光という別々の根源を持ちながら、「時にぶつかり混ざり合ったりする」という。

本格的に準備を始めたのは、今年3月。展覧会は、「言語」と「形象」それぞれの力について思考し続けた歩みの集大成になるという。

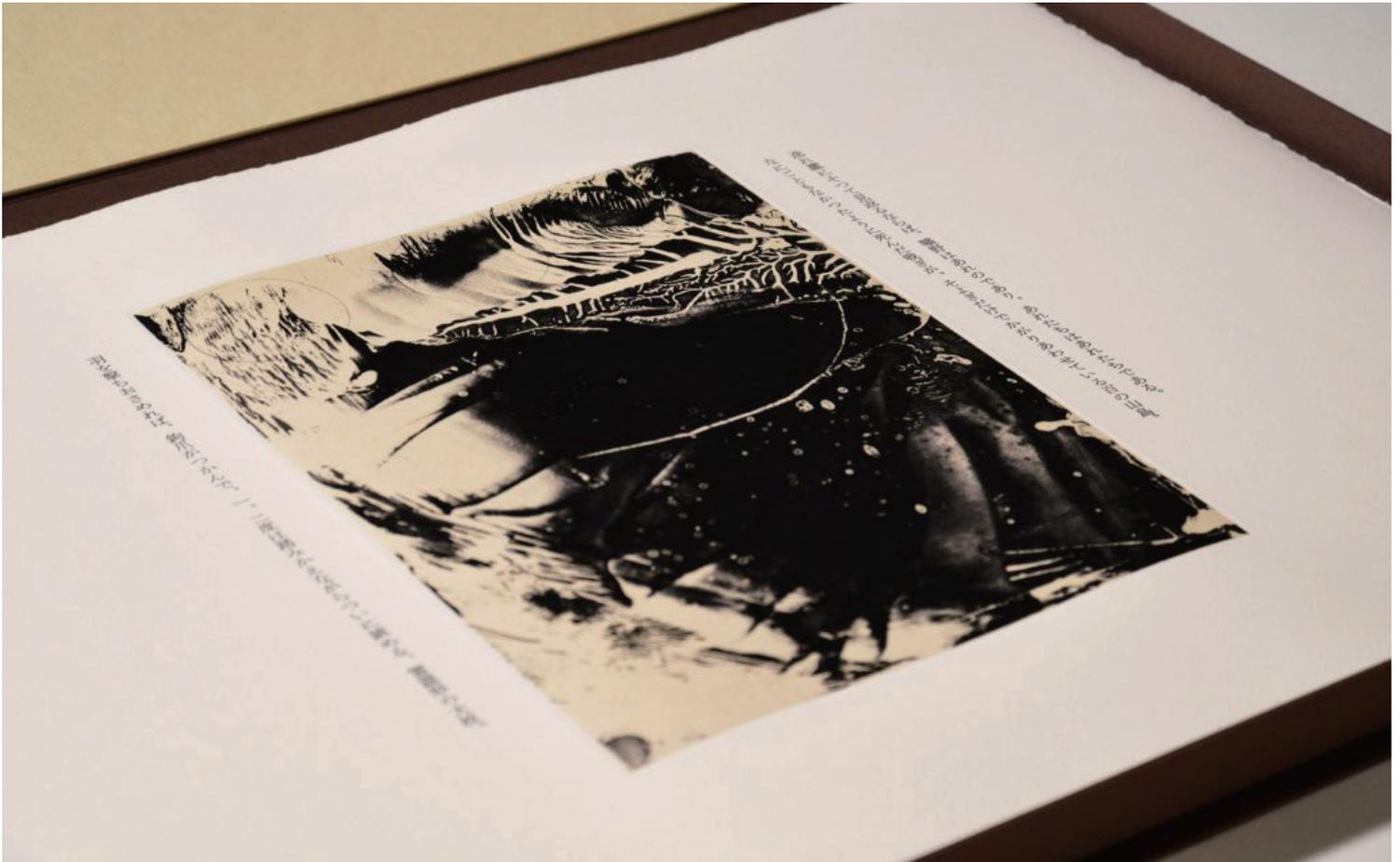
はたしてどんな展示が実現するのだろうか。ここでは平出教授の言葉から、その一部を見所としてピックアップした。

「インクの夢」

カンヴァスにその日の日付だけを大きく描く絵画作品で知られる河原温、想像上の国々の切手をおびたたく描いたドナルド・エヴァンズ、秘密めいた小宇宙を古びた箱の中に作ったジョゼフ・コーネル、詩人・美術評論家でデカルコマニーなどの制作も行った瀧口修造。そして、岡崎和郎、中西夏之、多摩美の教授でもあった若林奮…。会場で作品を見ることになる美術家は、洋の東西を問わないそうそうたる顔ぶれだ。しかも、ただ美術作品を並べるだけではなく、平出教授は会場で自身の書物論を視覚化する。



ドナルド・エヴァンズ《Domino.1934. Domino》(1974年 個人蔵 ©The Estate of Donald Charles Evans Photo: Kenji Takahashi)



加納光於+平出隆 《雷滴 その研究》（2007年 個人蔵 撮影：KARIN）

テーマは、哲学者ガストン・バシュラールの思想に由来する「インクの夢」。大地から生まれた文字が徐々にイメージへ変身するような書物の世界観を表現するという。まさに「言語」が「形象」と化する場面を目撃できるのかもしれない。実際に展示を見るのが待ち遠しい。

「空中の本」

建築家の青木淳氏が展示会の会場構成を手がける。平出教授とは、2015年に開かれた私小説家川崎長太郎の没後30年記念展において、その小屋を再現するプロジェクトなどで協働。しかも、「階段をめぐるって議論を重ねあう仲」なのだそう。建築家と詩人の思わぬ接点には、感慨を覚えざるをえなかった。

通常、同美術館の企画展示は2階の専用の

展示室で開かれるが、この展示会では1階にある特別展示室も使うほか、そのほかの常設展エリアでも展示会の関連作品にマークを付けてテーマへといざなうなど、美術館を全館丸ごと使った大胆な試みになるという。

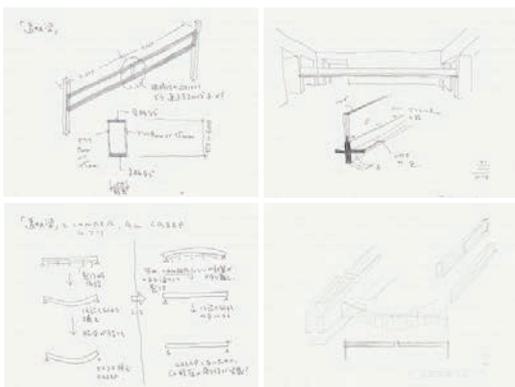
特に注目すべきは「空中の本」。青木淳特別設計のショーケースを使った展示だ。展示室の入口の壁と出口の壁を、宙に浮いた全長14mのアクリルケースでつなぎ、中に、平出教授のつくる実験的な書籍が収められるというのだ。宙を縦断する本は美術の多様な領域をつらぬき、つなぎ合わせる。本のほかにも平出教授のメールアートや奈良原一高の写真と共存する新作の詩の校正紙など、多様なメディアが宙を飛び交う。鑑賞者には、順路が記されたリーフレットを片手に会場を回って

もらう。普通美術展とは違った趣きの展示空間になりそうだ。

コーネルの箱の模型が飛び出す ポップアップブックも

印刷所と出版社の手元に1冊ずつしか残らないという活版印刷時代の「訂正原本」（印刷所と出版社とが校正内容を記録するための本）や、ジョゼフ・コーネルの箱の作品の模型をたくさん収めたポップアップブックなども展示されるという。美術館で開かれる詩人の展示会は、本好きも必見の充実した内容になりそうだ。

取材・文＝豊島瑠南
レイアウト＝小川敦生



青木淳《透明梁 アイデアスケッチ》（2018年）

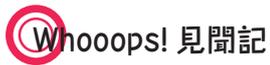
展示会情報

企画展「言語と美術—平出隆と美術家たち」

2018年10月6日～2019年1月14日、DIC 川村記念美術館（千葉県佐倉市）



（左）平出隆教授
（右）DIC 川村記念美術館外観



ロックの歌詞が道後温泉の街なかに出現

尾崎世界観（ミュージシャン、小説家）

古事記にも登場し、一説には「日本最古の温泉」ともいわれる松山市の道後温泉に2018年夏、突如として奇妙な文字群が出現した。仕掛け人は、映画『帝一の國』の主題歌などのヒットナンバーを世に送り出したロックバンド「クリープハイプ」の尾崎世界観さん。展示とともに、8月20日現地で開かれたトークショー取材した。



射的の体験型展示。メンバーの似顔絵を付けたキュービー人形を撃ち落とすと、歌詞の書かれたオリジナルの豆本がもらえる（*）

「真っ直ぐ行っても愛は行き止まり」

「今日は明日昨日になる」

「空気を読むことに忙しくて今まで忘れてたよ」

松山市の道後温泉を訪ねると、石垣、駐車場、小さな川の流れの中、スナックの跡地など街のあちこちに、流れる文字、流される文字、曲がりくねった文字、吊るされた文字でこうしたことばが展示されていた。昨年9月に始まり18カ月間にわたって開かれているアートイベント『道後オンセナート2018』の出品作品だ。『クリープハイプ・尾崎世界観の歌詩世界 in 道後』と名づけられたプロジェクトによって制作された。ことばの作者はロックバンド「クリープハイプ」の尾崎世界観さん。自伝的小説『祐介』を出版するなど、「ことばの人、」でもある。展示されたのは、尾崎さんが発表した曲の歌詞の一部。それぞれのフレーズが視覚から入って

くると、曲を聴くときとは別の味わいを感じたり思考を促されたりする。

汚れの変化が重要

2014年から開催されてきた『道後オンセナート』の「地元プロジェクト」として『クリープハイプ・尾崎世界観の歌詩世界 in 道後』が始動したのは、今年8月10日だった。尾崎さんが作った歌詞から地元の企画者がことばを選び、町の随所に展示していくという、クリエイターと地元民との協働プロジェクトである。

「（展示のオファーがあった時は）うれしかったですね。個人的に書いた歌詞で街を“汚す、”というのは」

8月20日、展示会場の一つである宝厳寺で開かれたトークイベントで、尾崎さんは晴れやかに語った。トークを開始する前には、本堂に一礼する敬

虔さも忘れなかった。「自分の汚い部分を誰かになすり付けるのが“歌詞、である」は尾崎さんの持論。「汚す」「汚れる」という行為や現象がまた、展示で重要な意味を帯びているように映った。

温泉施設の中庭にある川や石橋、公衆トイレ、駐車場、スナックの跡地といった地元民ですら見逃してしまいそうなスポットに配された歌詞の切り文字を、公式ガイドマップを手掛かりに探し歩くのが展示の趣旨だ。ただし、そういったパブリック・アートは時間が経つにつれて汚れ、朽ちていく。しかし、尾崎さんは「その変化こそが重要」と言う。「雨や人の手によって、自分のことばが街と一緒に汚れていく。人のアカで味が出てくるんです。次に訪れた時が楽しみですね」

日々の営みの中で蓄積されていく「汚れ」と「ことば」が響き合う場とし



道後温泉別館 飛鳥乃湯泉中庭での展示風景 (*)



スナック椿跡地での展示風景 (*)

て、展示には様々な遊び心が加えられていた。たとえば会場オリジナルグッズとして販売された、楽曲『愛の点滅』の歌詞がプリントされたトイレットペーパー。このアイデアは尾崎さん自身も非常に気に入ったらしい。

「なくなるものに手間をかけるというのがオシャレですね。僕に何かあったら皆がケツを拭くという意味もある」とコメントし、会場を大いに沸き立たせた。

忸怩たる思い

このイベントのテーマである「文学はアートになりえるか?」という問いに対して、「なれると思います」と尾崎さんは断言する。「本を読む時は一人で読みますよね。アートと一緒に、結局根本は一人で自分と向き合うということなんだと思います」

自身がミュージシャンと小説家という二重の表現活動が続ける中で、一線を引かれがちな二つの領域に幾度となく歯がゆさを覚えたという。自身の著作が文芸コーナーに置かれないことに忸怩たる思いを抱いているようだ。「ミュージシャンのくせにトークイベントをするな、と言われるとイライラします。常に悔しいと思っている。でも、そう思わないといけななんです」

そんな中で挑戦したこのプロジェクトは、「曲」として世に出された自分のことばを新たに切り抜いて道後の街に刻み付ける。尾崎さんにとってもまったく新しい試みだった。様々な手法を用いて再編されたことばの断片の数々は、普段曲で聴くそれとはまったく違った印象を鑑賞者に与えるかもしれない。尾崎さんからいくつかことばをピックアップして提案したそうだが、改めて「どれも強いことばだなあ」と感じたそう。どうやら作者自身のことばの持つ力の再確認にもつながったらしい。

最後に、来場した鑑賞者に感謝を述べるとともに、「この歌詞が街からなくなっても思い出してほしい」とコメント。尾崎さんが「ことば」にかける熱量を感じさせる半日だった。

取材・文・撮影 (*)・レイアウト
＝豊島瑠南



公式ガイドマップ(300円)。展示を鑑賞した後には葉として使える。楽曲『涙』になぞらえているらしい (*)

『道後オンセナート 2018』

会場：愛媛県松山市道後温泉エリアの随所

会期：2017年9月2日～2019年2月28日

<http://dogoosenart.com/>



尾崎世界観 (おざき・せかいかん)

1984年東京都葛飾区生まれ。2012年4月メジャーデビューのロックバンド「クリープハイプ」のボーカル・ギター担当。ミュージシャン、小説家。14年日本武道館2Days公演開催。16年小説『祐介』発表。17、18年エッセイ『苦汁100%』『苦汁200%』発表。18年に4年ぶりの日本武道館公演。5thアルバム『泣きたくなるほど嬉しい日々』9月25日発売。



2018.10.27.Sat
»» 12.2.Sun

The 6th
TOKYO INTERNATIONAL
MINI PRINT TRIENNIAL
2018

Tama
Art
University
Museum

第6回
東京国際ミニプリント・
トリエンナーレ 2018



94 各国・地域から集った
版画作品を一堂に展示

<http://www.tamabi.ac.jp/timpy/>

6



JAPAN FOUNDATION

文房堂



多摩美術大学校友会